

川南町文化財調査報告 3

川 南 古 墳 群

—第21・57号墳—

1984. 3

宮崎県児湯郡川南町教育委員会

序

文化財を発掘保存し、適切に管理し、その活用を図ることは国民の義務だと思います。川南町は、宮崎県の中部に位置し、気候温暖な土地で、千数百年前から人が住み、そのためか、町内全域から埋蔵文化財が発掘されている現状であり、1980年2月には円形周溝墓が、1981年3月には、方形周溝墓を発掘し、歴史と文化の流れを知る貴重な文化遺産として復元し、1982年3月に「東平下周溝墓群」として調査報告をしたところあります。又、1983年3月には、文化庁、県教育委員会のご指導により、全町に至っての「遺跡詳細分布調査」を実施し、「川南町の埋蔵文化財」として報告致しました。

しかし、近年特に、食糧基地を目指しての大規模農業への転換のために、大型機械導入等によって深耕され、飼料基盤の開発準備をはじめ、大型鶏舎、大型畜舎の建設が伸びつつある現状であり、今回は大型鶏舎建設に先立って、確認調査を実施致しました。

この地域は、川南古墳群（1961年2月国指定）の中央部に位置し、千数百年前には文化の栄えたところと推察され、遺構の眠る場所であります。調査は、県文化課主事にご指導を仰ぎ、町文化財保護審議会委員のご協力をいただき町教育委員会が実施しました。

この報告書が本町の歴史のための一資料として活用していただくとともに、年々失なわれていきます埋蔵文化財がいかに貴重なものであるかをご認識していただければ幸いです。尚、この調査にご指導、ご協力いただきました方々に厚く御礼を申し上げ序と致します。

1984年3月

川南町教育委員会 教育長 小嶋 進

例 言

1. 本書は、川南町教育委員会が調査主体となり確認調査を行なった報告書である。
2. 本書の執筆は、長津宗重・繁富勉が分担し、文責については日次に明記している。
3. 本書の作成にあたっては県文化課職員の協力があった。
4. 本書の編集は、長津・繁富があたった。
5. 本書において磁北はM.N.で表わす。
6. 調査の構成

調査主体	川南町教育委員会		
調査員	小嶋 進	教育長	
	黒木 修	社会教育課長	
	河野 健二	社会教育課係長	
	繁富 勉	社会教育課主事(調査担当)	
調査補助員	長津 宗重	県文化課主事	
"	新藤 繁秋	川南町文化財保護審議会委員	
"	遠藤 学	"	
"	福長 一	"	
"	永友 芳弘	"	
"	村井 格二	"	
"	坂本 敏明	"	
"	河野 庄次	"	
"	稻田 勝重	社会教育課職員	
"	竹村 義政	"	
"	吉村 典道	"	
"	掘尾 義一	調査協力者	
"	永友 信年	"	
"	税田 正己	"	
"	永友 聖子	"	

本 文 目 次

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査の経過.....	(繁富)	1
2. 遺跡の位置と環境.....	(長津)	1

第Ⅱ章 遺構と遺物..... (長津) 9

第1節 川南第21号墳

1. 調査の方法.....	9
2. 遺 構.....	9
3. 遺 物.....	9
4. 小 結.....	9

第2節 川南第57号墳

1. 調査の方法.....	17
2. 遺 構.....	17
3. 遺 物.....	17
4. 小 結.....	19

第Ⅲ章 おわりに (長津) 20

挿図目次

第1図	川南古墳群周辺図	5
第2図	川南古墳群分布図	7
第3図	T-1 北壁セクション図	10
第4図	T-2 北壁セクション図	10
第5図	T-3 南北壁セクション図	10
第6図	T-6 西壁セクション図	10
第7図	第21号墳墳丘実測図	11
第8図	前方部葺石実測図	13
第9図	T-8 葺石	15
第10図	T-12 葺石	15
第11図	T-2 葺石	15
第12図	T-1 葺石	15
第13図	川南第21・57号墳出土土器	16
第14図	川南第57号墳	18
第15図	須恵器出土状況図	19
第16図	土師器出土状況図	20

図版目次

図版 1	第21号墳全景	24
	第21号墳後円部トレンチ	24
図版 2	第21号墳前方部トレンチ	25
	第21号墳前方部葺石(T-3・4)	25
図版 3	第21号墳前方部葺石(T-6)	26
	第21号墳後円部葺石(T-1)	26
図版 4	第21号墳前方部葺石(T-6)	27
	第21号墳前方部葺石(T-3・4)	27
図版 5	T-3 セクション	28
	T-6 セクション	28
図版 6	第57号墳周溝出土土師器	29
	第57号墳周溝出土須恵器	29
図版 7	第57号墳周溝検出状況	30
	第57号墳周溝	30

第一章　はじめに

1. 調査の経過

1982年9月、国指定史跡川南古墳群を包蔵する土地として周知されている地域に養鶏業中村保氏より事業拡張のため鶏舎を建築する旨の届け出があったので、県教育委員会に連絡をとった。建築については、土地所有者と協議し延期することが出来たが、工事による古墳周辺(第21号墳)が崩壊されるおそれ、又、古墳群の一角に位置することから取り扱いには慎重な協議を重ねて確認調査を実施することになった。

調査は、1982年11月4日から20日まで12日間で川南町教育委員会が調査主体になり、県教育委員会に調査員の派遣を依頼した。

調査員に県文化課主事・長津宗重氏に担当してもらい、町社会教育課職員と文化財保護審議会委員が補助するとともに地元民の協力を得て実施した。

尚、当古墳群に関する調査例はなく、これが初めてである。

2. 遺跡の位置と環境

川南古墳群は、小丸川左岸の標高50~60mの台地縁に位置し、前方後円墳25基、方墳1基、円墳25基(消滅分も含む)で構成されている(第2図)。同じ台地縁で南東約3km離れて持田古墳群が存在する。当地域(川南町)の遺跡を概観する(第1図)。

旧石器時代の遺跡の発掘調査は行なわれていないが、大野寅男氏による精力的な踏査によって白駒遺跡(ナイフ形石器・細石核)、番野地C遺跡(尖頭器・細石核・剥片)、旭ヶ丘遺跡(尖頭器)、椎原遺跡(尖頭器・細石核・剥片)、大久保(通山)遺跡(細石核・ナイフ形石器)の5ヶ所が知られていた。遺跡詳細分布調査によって新たに谷ノ口遺跡(細石核)、住吉B遺跡(細石核)、卒手遺跡(尖頭器)、極風呂遺跡(石刃)の4ヶ所が追加された。遺跡は山地及び山麓に形成されている。

縄文時代の遺跡も発掘調査は行なわれていないが、遺跡詳細分布調査によって60ヶ所の遺跡が確認された。早期の山形押型文・横円押型文土器が、住吉B遺跡・丸山西原遺跡・旭ヶ丘遺跡・松ヶ迫遺跡・野田原遺跡・大久保遺跡等で確認され、込ノ口遺跡・旭ヶ丘遺跡・霧島遺跡・虚空藏免遺跡・大迫遺跡・丸山遺跡・丸山西原遺跡では焼石及び共伴土器によって集石遺構の存在が推定される。前・中・後・晩期の良好な遺跡は確認されていない。遺跡は山地及び山麓に形成されている。

弥生時代の前期・中期の遺跡の発掘調査は行なわれていない。前期の遺跡・遺物は未発見であるが、中期の遺跡・遺物に関しては刻目突帯を有する下城式の甕の口縁や逆L字口縁の甕の口縁を出土する下ノ原遺跡、下城式の甕の口縁を出土する赤石遺跡・前原B遺跡、

鉢先口縁の袋を出土する崩牛田遺跡がある。中期の遺跡は山麓の緑辺部に立地している。

後期の遺跡としては、瀬之口伝九郎・樋渡正男両氏によって東九州の安国寺式の備前波状文を有する壺・高坏等を出土する鍛治別府・形山上・十文字・唐瀬・脊袋・下垂門が挙げられている。^{註4}昭和29年に把言田遺跡の発掘調査によって不定形プランの住居跡が2軒検出され、壺・甕等の後期の弥生上器と伴に方形石庖丁等が出土している。^{註5}昭和53年には中ノ追遺跡の発掘調査によって5m×4.6mの方形プランの住居跡が検出され、壺・甕・高坏等の後期の弥生土器と伴に方形石庖丁・土製勾玉等が出土している。^{註6}昭和55年に東平下^{註7}1号円形周溝墓、昭和56年には東平下2号方形周溝墓が調査され、石囲い木棺を内部主体とする直径15.5mの円形周溝墓から直刀と壺・甕・高坏・鉢形土器・組合せ式木棺を内部主体とする一辺15mの方形周溝墓から壺・甕形土器が出土した。この2基の周溝墓は、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての日向における古墳出現前夜の墓制として注目される。東平下周溝墓群を造営した集落跡は未確認である。後期の集落跡は、標高80m~110mの緩やかな舌状台地に立地するAグループ(丸山西原遺跡・大迫遺跡・中ノ迫A遺跡)、標高80mの台地の中央部に立地するBグループ(香田原遺跡・弥次郎遺跡・把言田遺跡)、台地縁辺部に立地するCグループ(前原B遺跡・尾花B遺跡)に分けられる。特に大迫遺跡は、住居跡40余軒、周溝墓3基確認されているので、当地域の拠点集落であり、川南古墳群を造営する前段階の母体である。

古墳時代の遺跡としては川南古墳群に代表される。川南古墳群は、小丸川を見おろす標高約60mの左岸台地に位置し、前方後円墳25基、方墳1基、円墳25基で構成されている。前方後円墳の占める割合が^{註8}西都原古墳群の29基(計309基)、新田原古墳群の23基(計206基)、本庄古墳群の16基(計57基)、南方古墳群の6基(計12基)に比較すると高い上に、分布地域は狭い。盟主的な位置を占めるのは全長112m、後円部径63m、同高10.6m、前方部幅32m、同高4.6mの大塚(39号墳)^{註9}で、東西に20~30m級の小型の前方後円墳5基を従属させている。立地によって5グループに分かれる。^{註10}過去において12号墳(円墳)と33号墳(前方後円墳)から円筒埴輪・国光塚(円墳)^{註11}の石室から鉄劍・金環・土師器・天龍梅塚(円墳)^{註12}から勾玉・管玉・金環・日石塚から冠が出土している。また鐵別府の横穴式石室を内部主体とする円墳から硬玉勾玉1・須恵器の蓋坏2が出土している。特に国光塚の横穴式石室は須恵器が出土しておらず、県内において20数例確認されている石室の中では古式に属すると考えられる。川南古墳群の時期は、39号墳・11号墳を初現とする5世紀から30号墳の6世紀に造営された古墳群である。川南古墳群以外では唯一の前方後円墳である狐塚(55号墳)^{註13}の西の円墳から小田富士雄氏編年の第I期の両耳付の無蓋高坏が出土しているのは注目される。横穴墓、地下式横穴墓が墓制として採用されていない地域でもある。

歴史時代の遺跡については、上平門の奈良期の藏骨器を伴う火葬墓や宗麟原の供養塔^{註14}等が知られている程度である。当地方は、古代には韓家郷の一部に比定され、韓人(渡来人)との関係を想わせる所であり、また去飛(都農町)の駅と児湯(木城町高城)の駅を結ぶ古代の幹線道も想定される。また字名に「別府」等の地名が数多く残っており、中世の莊

間関係の遺跡が存在する可能性がある。寺跡としては、「日向地誌」に卒手寺址、海藏寺址、觀音寺址が記されているが、寺城としてはまだ確認されていない状況である。

このように、歴史時代(古代～近世)にかけての遺跡は数も少なく、今後文献史料とも併せて、確認していく必要がある。

〈註〉

- (1) 茂山謙・大野寅男 「児湯郡下の旧石器」(『宮崎考古』第3号) 1977年
茂山謙 「畔原型細石核－大野寅男採集石器集成(1)－」(『宮崎考古』第6号) 1980年
- (2)・(3) 川南町教育委員会 「川南町遺跡詳報分布調査報告書」 1983年
- (4) 潤之口伝九郎・種波正男 「日向川南村に於ける弥生式土器」(『考古学雑誌』34巻8号) 1944年
- (5) 石川恒太郎 「川南町把吉田遺跡」(『宮崎県文化財調査報告書』第3輯) 1958年
- (6) 宮崎県教育委員会 「宮崎県文化財調査報告書」第27集収録予定 1984年
- (7) 日高正晴 「川南町東平下の円形周溝墓について」(『宮崎考古』第6号) 1980年
第11回埋蔵文化財研究会 「西日本における方形周溝墓をめぐる諸問題」 1981年
- (8) 日高正晴・山中悦雄 「東平下周溝墓群－2号方形周溝墓－」(『川南町文化財調査報告1』) 1982年
- (9) 地元の人からの聞き取り調査。
- (10) 昭和56年表採。時期の決定できる程の破片ではないが、6世紀代のものである。
- (11)～(13) 河野助 「先住民遺跡考(川南町光原台地)」 1976年
- (14) 本村豪章 「古墳時代の基礎研究稿－資料編(1)－」(『東京国立博物館紀要』第16号) 1981年
- (15) 小田富士雄 「九州の須恵器序説」(『九州考古学』22号) 1964年
八女市教育委員会「八女古窯跡群調査報告」I～IV 1969年～1972年
- (16) 面高哲郎 「川南町発見の火葬墓」(『宮崎考古』第6号) 1980年
- (17) 宮崎県教育委員会 「宮崎県の文化財」 1982年
- (18)・(19) 喜田貞吉・日高重孝 「日向国史」 1930年

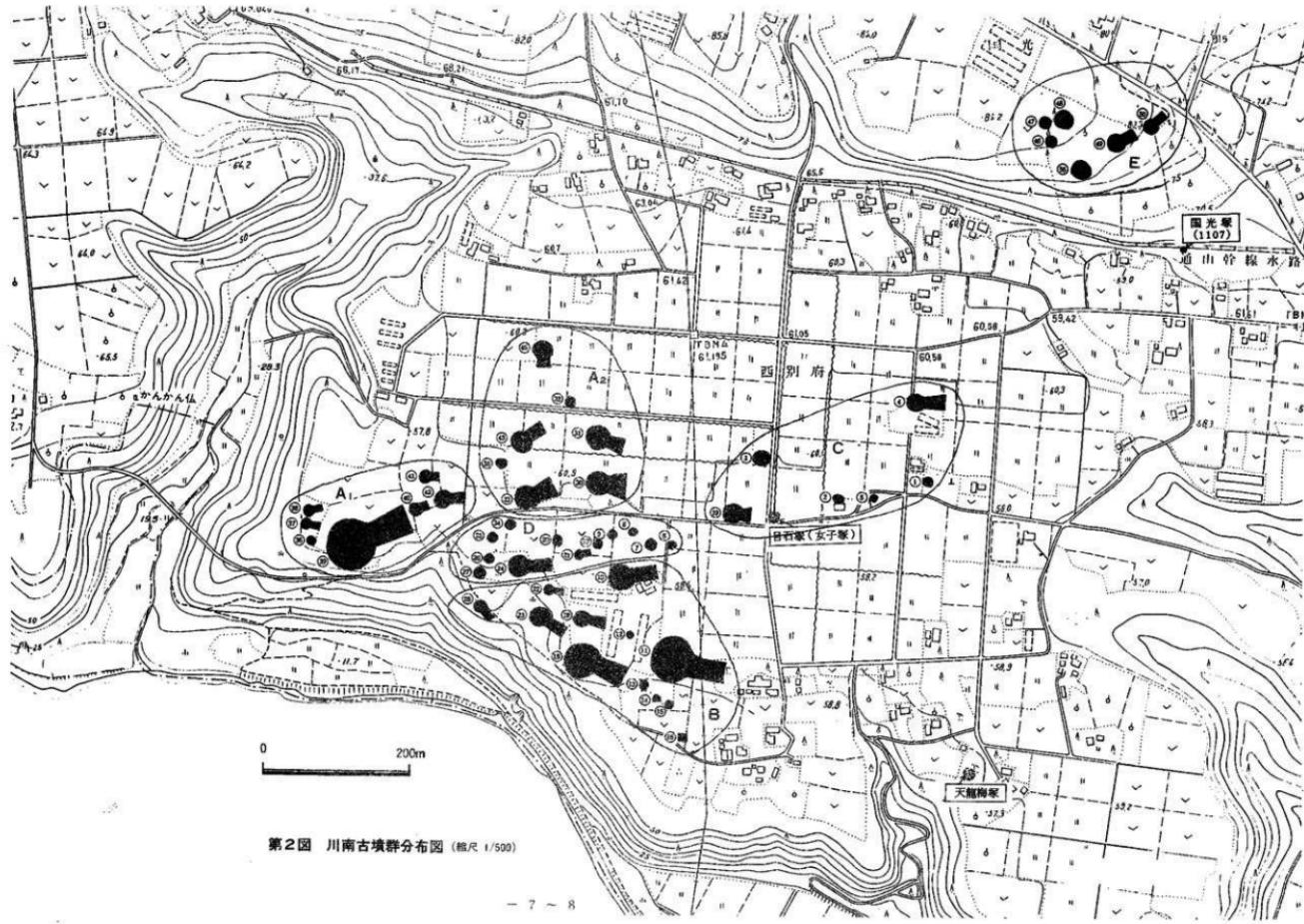
遺跡地名表

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代
1001	川南古墳群	大字川南字西ノ別府ほか	古 墳	古 墳
1064	野田原遺跡	大字川南字北原	散 布 地	繩文～弥生
1069	萱根遺跡	大字川南字萱根	散 布 地	弥 生
1071	白鬚遺跡	大字川南字白鬚	散 布 地	先土器～古墳
1074	火ノ口遺跡	大字川南字火ノ口・白鬚	散 布 地	繩文～古墳
1075	下原遺跡	大字川南字下原・星松原・大久保原・金六松	古 墳	弥生～古墳
1076	大久保原A遺跡	大字川南字大久保原	墳 墓	弥 生
1077	大迫遺跡	大字川南字大迫・下東	集 落 跡	弥 生
1078	中ノ追A遺跡	大字川南字中ノ追・綿打	集 落 跡	弥 生
1079	中ノ追B遺跡	大字川南字中ノ追	散 布 地	弥 生
1080	綿打上A遺跡	大字川南字綿打上	散 布 地	弥 生
1081	綿打上B遺跡	大字川南字綿打上	散 布 地	弥 生
1082	須田久保遺跡	大字川南字須田久保・中ノ追	散 布 地	弥 生
1083	松ヶ迫A遺跡	大字川南字松ヶ迫	散 布 地	繩文～弥生
1084	松ヶ迫B遺跡	大字川南字松ヶ迫	散 布 地	繩文～弥生
1095	東国光遺跡	大字川南字東国光・把言田・山下・道上	散 布 地	弥 生
1096	把言田遺跡	大字川南字把言田	集 落 跡	弥 生
1097	前ノ田村遺跡	大字川南字前ノ田村南・前ノ田村西・西国光	散 布 地	弥 生
1098	前ノ田村上遺跡	大字川南字前ノ田村上	散 布 地	弥 生
1099	持ノ木遺跡	大字川南字持ノ木・持久保・金六松	散 布 地	繩文～弥生
1100	前原A遺跡	大字川南字前原・持ノ木	散 布 地	弥生～古墳
1101	前原B遺跡	大字川南字前原	集 落 跡	弥 生
1102	湯追遺跡	大字川南字湯追・新湯追	散 布 地	繩文～古墳
1103	新湯追遺跡	大字川南字新湯追・地蔵谷	散 布 地	繩文～古墳
1104	西国光A遺跡	大字川南字西国光	散 布 地	弥 生
1105	西国光B遺跡	大字川南字西国光	散 布 地	弥生～古墳
1106	上ノ原遺跡	大字川南字上ノ原	散 布 地	弥生～古墳
1107	国光塚古墳	大字川南字国光	古 墳	古 墳
1108	天神前遺跡	大字川南字天神前・国光・蟻ノ別府	散 布 地	弥生～古墳
1109	尾花A遺跡	大字川南字尾花坂上・尾花西平・角谷提尻	散 布 地	弥生～古墳
1110	尾花B遺跡	大字川南字尾花坂上・尾花坂平	古 墳・集 落 跡	弥生～古墳
1111	勝司ヶ別府遺跡	大字川南字勝司ヶ別府・鬼ヶ久保・勝司ヶ別府南	散 布 地	弥生～古墳
1117	尾花塚古墳	大字川南字尾花坂上	古 墳	古 墳

「川南町の埋蔵文化財」より



第1図 遺跡周辺地図 (縮尺 $\frac{1}{25000}$)



第2図 川南古墳群分布図 (縮尺 1/500)

第II章 遺構と遺物

第1節 川南第21号墳

1. 調査の方法

墳丘裾の各部に幅2m、長さ10mのトレンチを12本設定し、第21号墳の規模・形態の確認を行なった(第7図)。

2. 遺構

トレンチで確認された基本層序は、第I層が耕作土、第II層が褐色土(硬質)、第III層が黒色土(硬質)、第IV層が暗褐色土(赤ホヤ泥り)、第V層が赤ホヤ層である(第3・4・5・6図)。浅い周溝は、第IV層に掘り込んでおり、葺石も第IV層上に敷かれている。葺石は、墳丘裾の境界に長さ20~30cmの河原石を並べ、内側にそれより小型の石を葺いている。

T-8・12で後円部の南端を、T-2で北側のくびれ部を、T-3~6で前方部端を確認した(第8~12図)。周溝は、T-2・3・12で北側のラインを、T-4~6で東側のラインを、T-1・7で南側のラインを、T-10で西側のラインを確認した。その結果、第21号墳は墳丘の主軸長30.0m、後円部径17.0m、後円部高2.5m、前方部幅12.0m、前方部高1.0mの規模であり、幅2.5m、深さ0.2mの周溝を有することが確認された(第7図)。

3. 遺物

(1) 須恵器

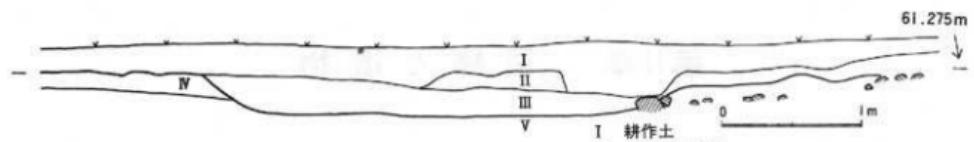
甕(第13図9・10)

9はT-10の葺石の間から出土した胴部片で、外面は平行叩きを施し、内面は叩きの後、ナデ消している。色調は青灰色を呈し、胎土には小砂粒を若干含むが良好に精選されており、焼成は良好である。

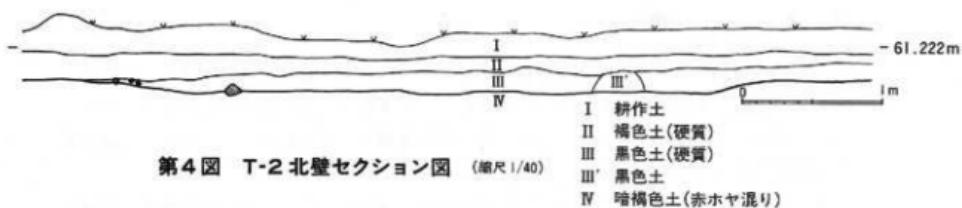
10はT-12の葺石の間から出土した口縁部片で、口縁端部は三角形に近く外側に肥厚し、先端は丸くまとめている。内外面ともナデを施す。色調は青灰色を呈し、胎土には小砂粒を若干含み、焼成は良好である。

4. 小結

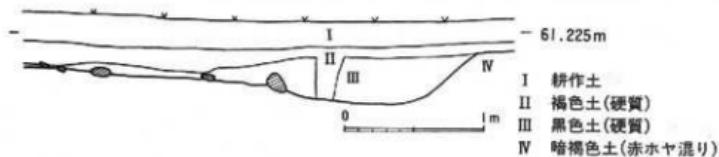
第21号墳は、主軸長30.0m、後円部径17.0m、後円部高2.5m、前方部幅12.0m、前方部高1.0mの規模であり、周囲に幅2.5m、深さ0.2mの周溝を有することが確認された。
当古墳の造営時期は、須恵器甕の時期では小田富士雄編年の第III期の6世紀後半であるが、墳丘の形態から6世紀前半に比定される。



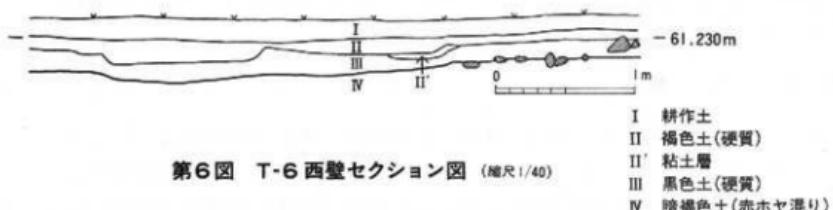
第3図 T-1 北壁セクション図 (縮尺1/40)
 I 耕作土
 II 褐色土(硬質)
 III 黒色土(硬質)
 IV 暗褐色土(赤ホヤ混り)
 V 赤ホヤ層



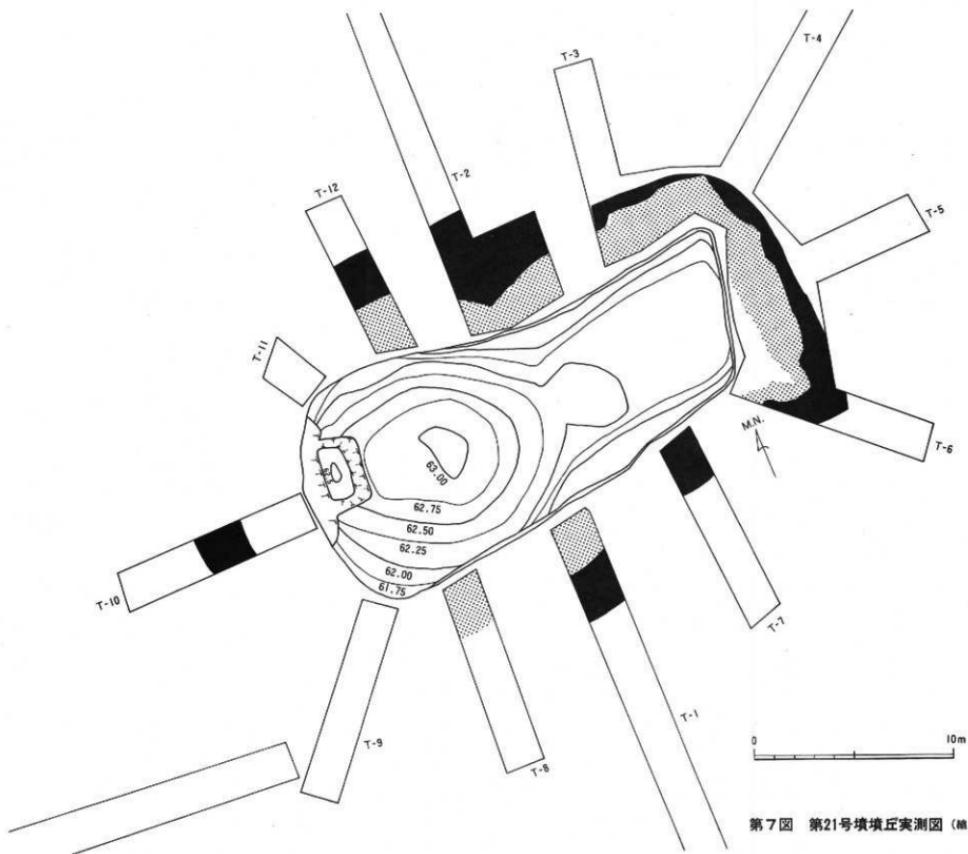
第4図 T-2 北壁セクション図 (縮尺1/40)
 I 耕作土
 II 褐色土(硬質)
 III 黒色土(硬質)
 III' 黒色土
 IV 暗褐色土(赤ホヤ混り)



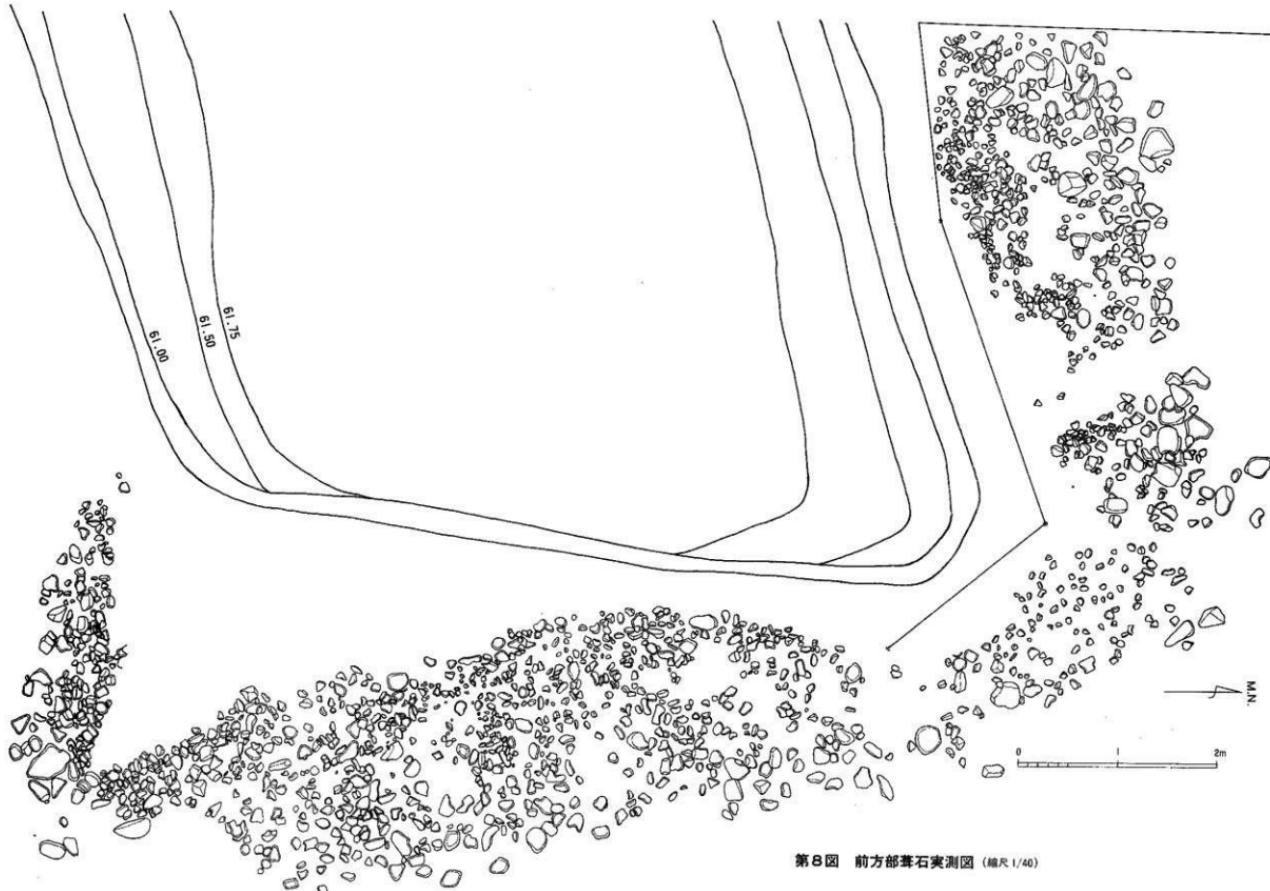
第5図 T-3 南北壁セクション図 (縮尺1/40)



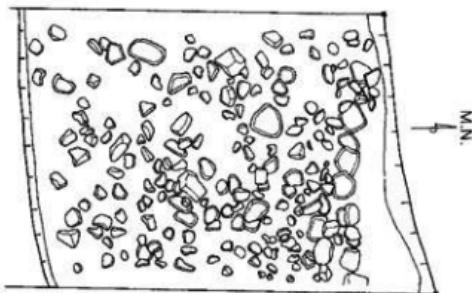
第6図 T-6 西壁セクション図 (縮尺1/40)
 I 耕作土
 II 褐色土(硬質)
 II' 粘土層
 III 黒色土(硬質)
 IV 暗褐色土(赤ホヤ混り)



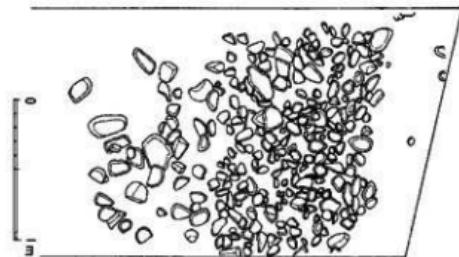
第7図 第21号填埋丘実測図 (縮尺1/200)



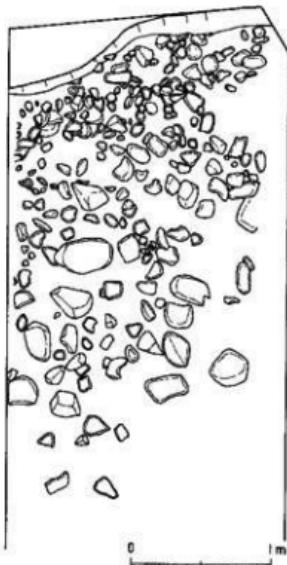
第8図 前方部葺石実測図 (縮尺1/40)



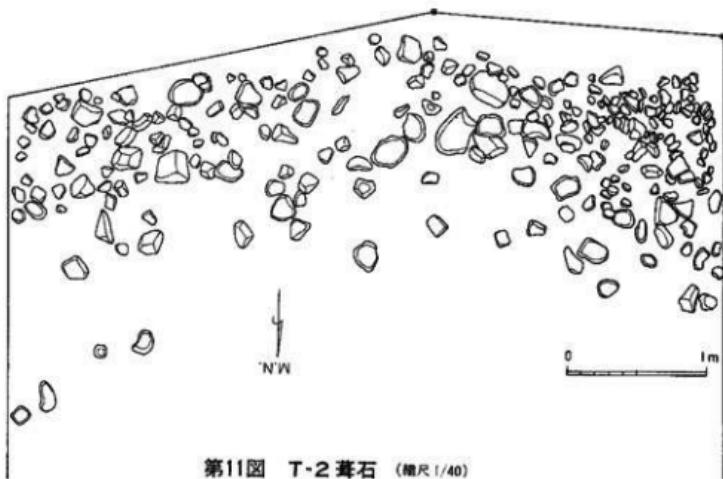
第9図 T-8 莖石 (縮尺1/40)



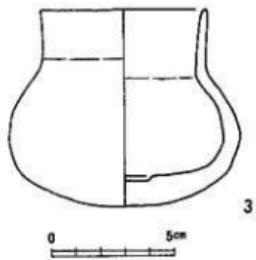
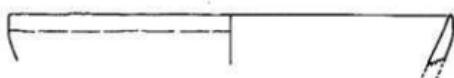
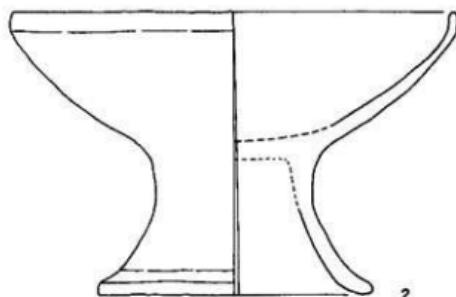
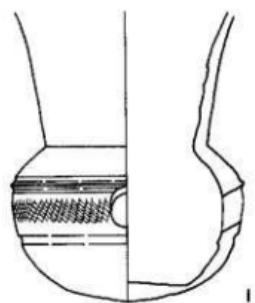
第10図 T-12 莖石 (縮尺1/40)



第12図 T-1 莖石 (縮尺1/40)

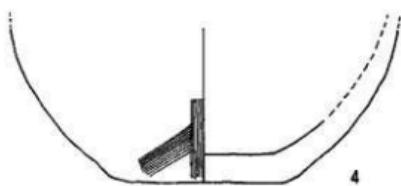


第11図 T-2 莖石 (縮尺1/40)



0 5cm

3



4



5



6



7



8



9



10

第13図 川南第21-57号墳出土土器 (縮尺1/2)

第2節 川南第57号墳

1. 調査の方法

T-4 の北東端で赤ホヤ面に黒色土が確認されたので、トレンチを拡張した。その結果、直径12.5m～13.0mの円形周溝が確認された。

2. 遺構

遺構は、耕作によってかなり削平されており、周溝は浅い所で8cm、深い所で26cmしか残存していなかった。周溝は幅75cm～185cmで、断面はU字形を呈している。内部主体は既に削平されていた(第14図)。

3. 遺物

遺物は、土師器が北側の周溝から、須恵器が北西側の周溝から出土している(第15・16図)。

(1) 須恵器

壺(第13図1)

1は、現高11.8cm、頸部径6.6cm、胴部最大径9.4cmである。やや長く外上方へ広がる太い頸部を有し、横描波状文を施す。体部はほぼ球形をなし、底部は丸い。肩部の明瞭な稜とその下位の沈線の間に横描列点文を施し、ここに円孔を穿っている。底部にはナデを施す。色調は青灰色を呈し、胎土には大粒の砂粒を若干含むが精選されており、焼成は堅緻である。

壺(第13図5～8)

5・6・7は同一個体の胴部片で、外面は平行の叩き、内面は叩きの上をきれいにナデ消している。色調は青灰色で、胎土は精選されており、焼成は良好である。

8は、5・6・7とは別個体の胴部片で、内面には同心円の叩きを、外面には平行叩きを施す。色調は青灰色で、胎土には小砂粒を若干含むが、焼成は堅緻である。

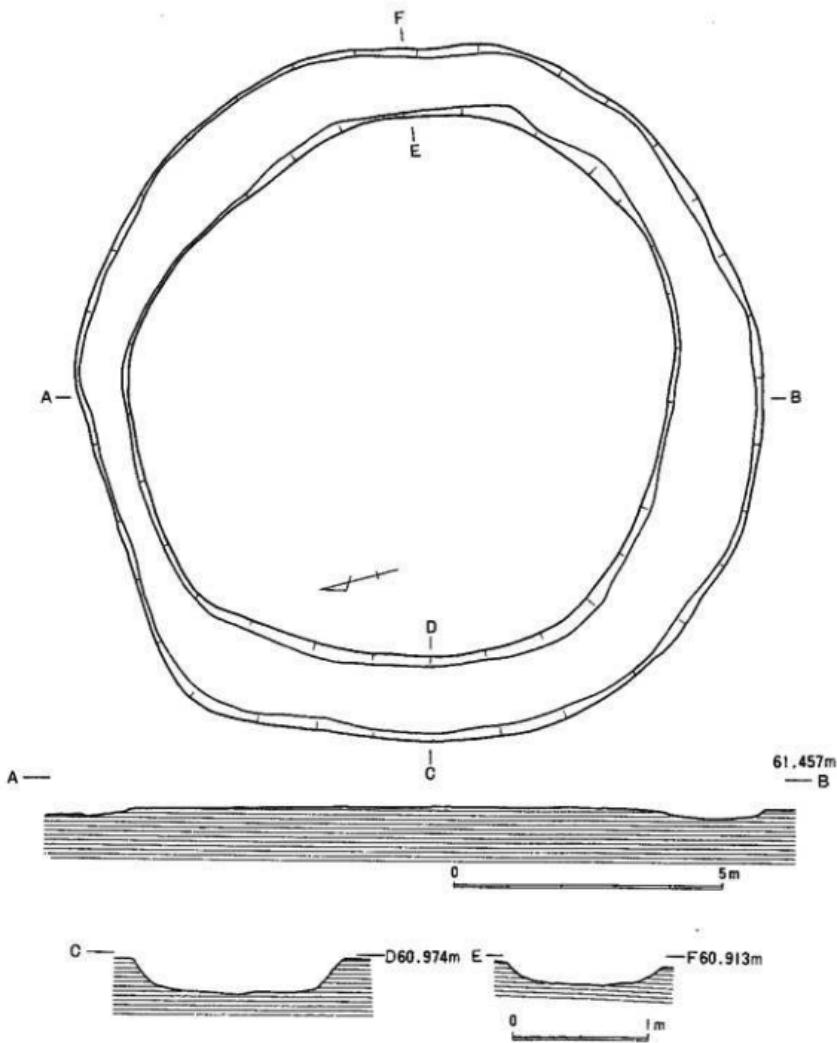
(2) 土師器

壺(第13図3)

3は、口径6.8cm、器高8.0cm、胴部最大径9.4cmである。口頸部はほぼ直立し、口縁端部は丸い。体部は球形を若干つぶした形で、底部は丸い、外面は、口頸部に横ナデを施し、体部は風化著しく不明であるが、ヘラ磨きと思われる。内面は、口頸部に横ナデを、体部にナデを施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には石英などの小砂粒が多く、焼成は良好である。

高坏(第13図2)

2は、坏部口径18.0cm、器高11.5cm、脚端部径11.2cmである。坏部は、大きく外上方へ広がり、口縁部はほぼ直立し、口縁端部は丸い。脚部はほぼ真すぐ伸び、途中から外反し、



第14図 川南第57号墳 (縮尺1/100)

脚端部で大きく外反する。脚端部は丸い。色調は黄褐色を呈し、胎土には小砂粒を多数含み、焼成は良好である。

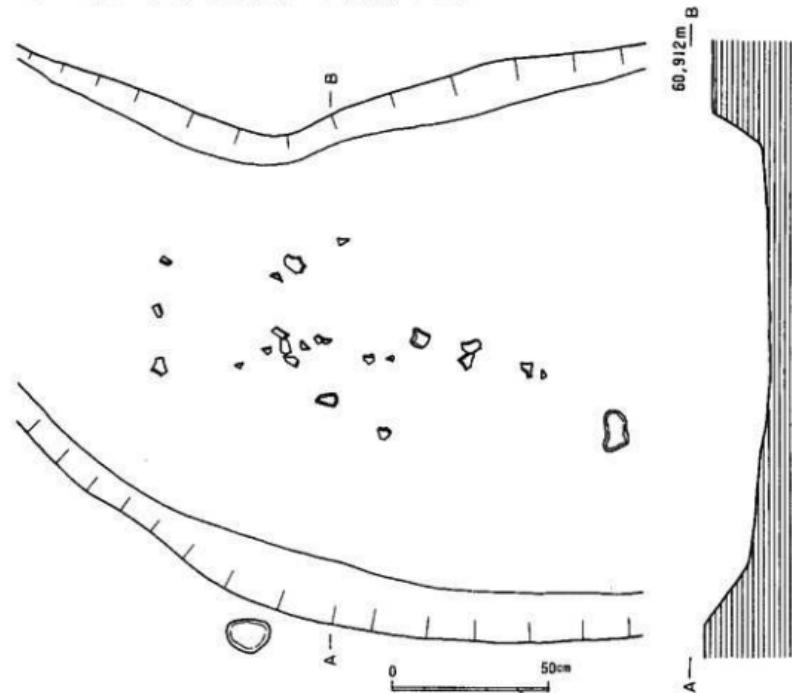
甕（第13図4）

4は、口径18.1cmの口縁部で、口縁端部は鋭く、内外面とも横ナデを施す。底部は平底で、外面にハケ目を、内面にナデを施す。色調は赤褐色を呈し、胎土には小砂粒を若干含み、焼成は良好である。

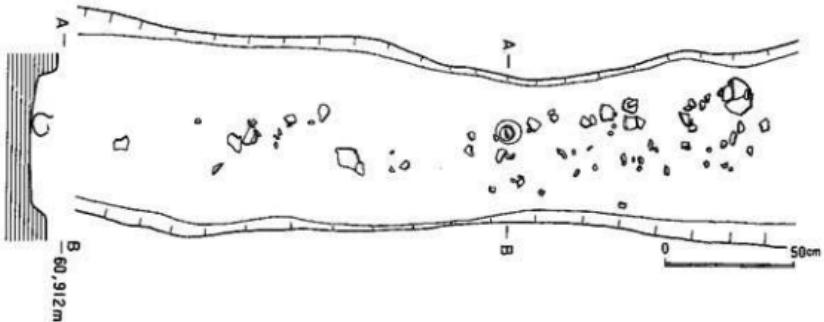
4. 小 結

第57号墳は、幅75cm～185cmの周溝を有する直径10.0mの円墳であり、耕作によって主部は既に削平されており、かろうじて周溝のみが遺存していた。周溝から出土した須恵器の甕は、肩部の明瞭な稜と太い頸部の点から、小木原1号地下式横穴や六野原30号地下式横穴出土の甕よりも古い様相を示し、小田富士雄氏編年の第II期に相当し、6世紀前半の時期に比定される。土師器の培・高坏からも甕の時期は首肯される。

よって、第57号墳の造営時期は6世紀前半である。



第15図 須恵器出土状況図 (縮尺1/20)



第16図 土師器出土状況図 (縮尺1/20)

第三章 おわりに

川南第21号墳は、試掘の結果、主軸長30.0m、後円部径17.0m、後円部高2.5m、前方部幅12.0m、前方部高1.0mの規模の前方後円墳であり、造営時期は須恵期により6世紀前半に比定される。第57号墳は、墳丘を失った円墳であり、造営時期は6世紀前半に比定される。2基の古墳の川南古墳群内の位置を明らかにするために、下記に川南古墳群のグルーピングを行なう。

当古墳群は立地的に、小丸川を見おろす台地端部のグループと山手の前方後円墳2基・円墳4基で構成されたEグループ(第46~50・56号墳)に分かれる。台地端部のグループは、直径10m級の小円墳群のDグループ(第6~9・20・21・24~27・34号墳)を境にして、第39号墳(主軸長112m)を中心として前方後円墳6基・円墳1基で構成されたA-1グループ(第36~42号墳)、前方後円墳5基・円墳2基で構成されたA-2グループ(第30~33・35・43・45号墳)、第11号墳(100m)と第18号墳(85m)を中心として前方後円墳9基・円墳4基・方墳1基で構成されたBグループ(第10~16・18・19・21~24号墳)、前方後円墳2基・用墳5基で構成されたCグループ(第1~5・29号墳)に分かれる。

Aグループの第39号墳(112m)・Bグループの第18号墳(85m)・第11号墳(100m)が造営される段階→第39号墳を意識しながら台地端部から中央部へ20~60級の柄鏡式の前方後円墳が造営される段階→第33号墳(55m)の造営される段階→第30号墳(55m)の造営される段

階が想定される。帆立貝式の前方後円墳である第45号墳(35m)は、主軸方向を従来の東西方向とは異なり南北方向にとっており、この段階に何らかの規制が働いたと考えられる。このことは第29号墳(40m)にもあてはまる。当古墳群は、第11・18・39号墳を除くと20~60m級の前方後円墳であり、Aグループの中では第39号墳が突出し他と格差があるのに対してBグループは全体的に均整のとれた構成が行なわれている。Aグループ・Bグループが優位的に拮抗しあうのに対して、CグループとEグループは劣位的な位置にある。

過去において第12号墳(円墳)と第33号墳(前方後円墳)から円筒埴輪、国光塚(円墳)の石室から鉄劍・金環・土師器、天龍梅塚(円墳)から勾玉・管玉・金環、目石塚から冠、蟻別府の円墳の石室から勾玉・須恵器の蓋坏、第55号墳の西の円墳から須恵器の両耳付の無蓋高坏の出土が知られている。当古墳群は、5世紀から6世紀にかけて造営された当地域の首長墓の墓域であると考えられる。

《註》

- (1) 小田富士雄 「九州の須恵器序説」(『九州考古学』第22号) 1981年
八女市教育委員会 「八女古窯跡群調査報告」I~IV 1969~1972年
- (2) 日高正晴 「小木原古墳」(『九州総合自動車道埋蔵文化財調査報告書』(1)) 1972年
- (3) 茂山謙・長津宗重 「六野原30号地下式横穴」(『国富町文化財資料』第3集) 1982年
- (4) 註1に同じ

図 版

図版 1



第21号墳 全 景



第21号墳 後円部トレンチ

図版 2



第21号墳 前方部トレンチ



第21号墳 前方部葺石(T-3・4)

図版 3



第21号墳 前方部葺石(T-6)



第21号墳後円部葺石(T-1)



第21号墳 前方部葺石(T-6)



第21号墳 前方部葺石(T-3・4)

図版 5



T-3 セクション



T-6 セクション



第57号墳 周溝出土土師器



第57号墳 周溝出土須恵器

図版 7



第57号墳 周溝検出状況



第57号墳 周溝

川南町文化財調査報告 3

川 南 古 墳 群

— 第21・57号墳 —

昭和59年3月31日

編集・発行 宮崎県川南町教育委員会

〒889-13

宮崎県児湯郡川南町大字川南13680番地の1

印 刷 齋 尾 形 印 刷

